

第29回万国地質学会議を終えて

石原舜三¹⁾

第29回の万国地質学会議を無事終了することができ、かつ諸外国の参加者からお褒めの言葉ばかりを頂いて、関係者の一人としてほっとしていると同時に、会議成功へ向けて日夜奮闘された協力者の方々に心からお礼申し上げたい。

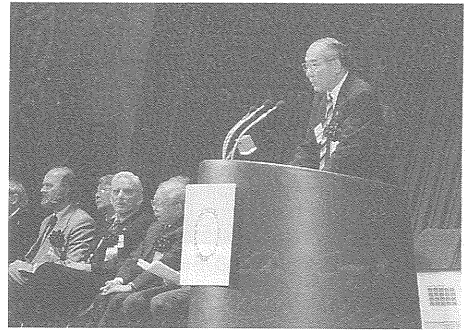
ある国の経済的発展度、治安度、政治的安定度を計る一つの目安としてはオリンピックの開催があると私は常々思っているが、東京オリンピックは1964年の秋に実施されたから、この頃既に日本は世界の有識者によって戦後から立ち直っていたと見做されていたことになる。学会議の開催はそれより2期程度遅れるであろうから、1976年の第25回会議(シドニー)で日本招致の提案(佐藤, 1989)がなされても不思議では無かった。事実、鉱物-鉱床関係の国際会議, IMA-IAGOD 会議は1970年に東京の経団連会館と国立京都国際会議場で2日間ずつで実施されている。しかし、当時のIGC 招致運動には国内の賛同が得られなかった。

私の記憶が正しければ当時の反対理由は次のようにまとめられる。

- 1) 会議の規模が大きすぎる。特に国際学会に対する国家補助が少ない ……実施不能論。
- 2) 各国で地質調査所が事務局を行っているが、日本の地質調査所が諸外国のものに比し小さく、事務処理機能が無い。 ……事務局不在論。
- 3) Session が多いため専門性が薄まり、学問分極化、専門化の中で高度な議論が出来ない ……IGC 不要論。

これらの点は初提案から16年たって変わっていないわけではないが、これらの緒点を突破できたから、会議が成功裏に終了したと言えるのである。

1) まず規模の点は国立京都国際会議場の他、現在では幕張メッセ、横浜等に大きなものが出来ている。問題は経費であるが、国家補助が少ない点に



は改善は見られず、従って私達がとった方法は登録料を高くする(前回の1989年のワシントンの\$200を約2倍の45,000円とした)ほか、民間からの募金、産官の協会、財団・特殊法人などの十分な活用である。資金源の比率は最終的に下記の通りであった。

参加者(登録料)	34.8%
募金	45.5%
協会・財団・特殊法人等	16.0%
国	3.7%

幸いバブル好況期のピークを若干ずれていたものの、今にして思えば全く幸運な時期に募金活動を行う事ができ、上記のように全経費の約46%を募金から賄う事ができた。この点は延期した16年間の日本経済の大躍進の賜物であると見る事ができ、協力された民間各社に感謝したい。

また高い登録料に対する参加者減少については、4,000人の予定に対して4,277人の参加者があったから、全くの危惧であったと見做しうる。

2) 一方、事務局については最終的に地質調査所がおかれた。お金の問題が解決しても学会開催には人手の問題がある。学会活動を研究業績と見做さない日本の習慣のため、研究者の奉仕活動に頼らざるを得ない。幸にもボランティア活動の精神が日本にも広がり、地質調査所の有志が献身的活動を実施

1) 第29回万国地質学会議事務総長, 工業技術院院長:

〒100 東京都千代田区霞が関1-3-1

キーワード: 万国地質学会議, 募金, 国家補助, 横断性



写真1 国立京都国際会議場における皇太子殿下，渡部恒三通商産業大臣(左)と筆者(右)．The Daily Yomiuri 提供．

したことが、事務局が機能した最大のきっかけとなったのである。この点は他の小委員会においても同様であり、それぞれの母体で献身的な協力者に抛って委員会が成立した。

一方、事務処理に関していえば、今回の IGC 成功の影には1980年代を通じて国内外ともに光ファイバ通信を中心とする通信網整備、コンピュータ・ワープロなどの事務機器の発達の幸運があり、この点は16年前の見通しには含まれていなかった。

3) IGC が地球科学全体の他分野に亘る点は、他分野にまたがる Multidisciplinary subjects の討論会を行う事により、むしろ利点ともなるもので、今回は特別シンポジウム“A：地球の歴史、特に島弧の発達”、“B：人類生存に向けての地球科学”のほか、I-1、I-2、I-3などの他分野を包括する特別シンポジウムを多くした。今後とも IGC はこの総合性・横断性を生かした運営をすべきである。

政府や企業など一般社会に説明した経験から言えば、この114年の歴史を持ち、地球科学の全分野を網羅した国際会議があることは地球科学者の非常に大きな財産であり、その必要性を容易に説明することができた。今後とも地球科学者全体として結束を固め、対外的に対処することが必要であると痛感した次第である。

なお、今回の万国地質学会議は、皇太子殿下のご臨席を賜ったが、殿下には国立京都国際会議場へのご入場は初めてであったと聞く。また、開会式とパーティとの間に来賓との対話、特に外国からの招待

者との直接の意見交換をする場を希望されたが、殿下とのお話しの内容について事前に熱心に質問してきたアメリカ合衆国の Prof. Chuck DRAKE が印象的であった。

参加者の裏話としては、やはりロシヤ、ウラジオストクの太平洋海洋学研究所の V. FILAT'EV 君であろう。貨物船で神戸に着き、自転車で京都国際会議場に駆け付け、帰りは横浜まで自転車を漕ぎ、再び貨物船で帰国したと聞いた。彼の名は VILOR、レーニンと10月革命に因んで、Vladimir Ilich Lenin October Revolution の頭文字をとって彼の父親が名付けたと言う。大変頼もしい青年である。

事務総長在職中に最も痛切に感じたことは、国際的な学術会議に対する国や財団からの資金援助の少なさである。前回のアメリカ合衆国では30パーセント以上を連邦政府が負担したが、京都の場合には国が4パーセント弱を支給したにすぎない。現在、我が国は多方面から国際貢献を求められている。少なくとも学術会議に登録されている学会が主催する国内の国際会議には思い切った公的資金援助をする事が、世界の人々のみならず我が国にとっても重要な事ではあるまいか。

文 献

佐藤 正(1989)：IGCの歴史と第29回(1992)日本開催。地質ニュース，no. 424，7-11.

ISHIHARA Shunso (1993): My impression on preparation for the 29th IGC.